

---

# ぶらっちなむ・ボーイズ

ほっし～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふらっちなむ・ボーアズ

### 【Zコード】

Z4159E

### 【作者名】

ほつしー

### 【あらすじ】

「きやあああああああ…」「うわあああああ！」陽射しが焼けるような暑い夏。「何よ！奈津かと思つたじやない！」「いや、、、奈津ですけど」「何してんのよーこんなとこで！」「いや、、、こ僕の部屋ですけど」突然知らされた大好きなスキー場の閉鎖。地元の川に現れた真っ白な巨大魚。魚の消えた川。真つ二つに割れた地元の町。冬少年（27歳だけど）達は、全てをあの頃に戻すため、起死回生とも言えない作戦を決行する。

## プロローグ（前書き）

恋愛小説かけなくて「」めんなさい（^\_-^）アハハ

## プロローグ

「てめえ奈津……真面目にやれー！俺が喰われんだろ？」「…」

「ソレこれで田一杯だよ～お」

僕の名前は熱海奈津。海と川と山に囲まれたこの町で、27年間平凡に生きてきた。

これから先も平凡な人生と思つてゐる。相当余程の事がない限り。

だが起きた。

余程の事が。

マリンジットを操り、猛スピードで水上を疾走する奈津。

そして、マリンジットから伸びる一本のロープ。そのロープに引っ張られ、梅男は水上をバウンスする毎に勢い良く滑る。

両足には板を装着。世間一般で言われてゐる、ウェイクボード。

ただ世間様のウェイクボードといふのは、梅男のすぐ後。

梅男から5メートルほど距離、水中からぴつたりと梅男をマークしている白い物体。

「奈津ー！面舵いつぱいだコノヤロウーー！」

「え、え？ 面舵つて、どっち ？！」

「面舵つたら面舵だばかー！ それでも漁師の中では 面舵いつぱーい、と操舵

少なくとも、奈津の知ってる漁師の中で 面舵いつぱーい、と操舵する漁師はない。

その様子を岸で見守るしかない富田、紺、晴の三人は、白い物体が梅男に迫る度に奇声をあげている。

「ふあ ！」

「ああ ！」

推測するに、

早く逃げて ！

の意味。

拭う間もなく水飛沫が顔に吹き付けてくる。

耳をかすめる風邪なんて、もうびゅんびゅんいつてる。

歪んでいく視界の中で、奈津は自分の頭の中を肩越しに覗き込むように記憶を辿る。

思えばそり、あれがすべての始まりだったのかも知れない。

## 登場！！人物

奈津  
なつ

主人公。家業の漁師を手伝いながら、地元の町で毎日を過ごす。気が小さく、いつも自分の意見を言えないでいる。

梅男  
うめお

奈津の幼馴染。自分の意見は絶対に曲げない超自己中ファイター。人間離れした身体能力の持ち主。夏の間は家業の海の家を手伝っている（夏以外の時期は謎）

富田  
とみた

小太りだが実は5人の中で一番運動神経が良い。いつも梅男とオチのない話を繰り返している。奈津とは幼馴染。家業の寿司屋を手伝っている。

紺  
こん

口数は少なく一見クールだが、実は人一倍熱く目立ちたがり屋。そのため見栄っ張りで女の子に目が無い。奈津とは幼馴染。家業の民宿を手伝っている。

晴  
はる

奈津の幼馴染。俗に言う優等生。大人びていて、いつも頼られる存在。家業の花火師を手伝っている。

満里  
まり

奈津達が毎年冬にお世話になっているペンションの娘。さっぱりした性格のため、あまり女扱いされない。

那美

他界した父の後を継ぎ、奈津達が住む町でマリソンショップを経営している。

信

奈津の父親。漁師を営む。

明

真里の父親。ペンションのオーナー。

タ力

奈津の幼馴染。地元の町で釣りをこよなく愛する。

将一

ゴツイ体と強面の見かけによらず、生き物全般を大切にしている。タ力と同じく釣りを通じ地元の川を愛している。

## 選手一一宣言

「今年もー、晴天にー、恵まれー」

良く耳にするようなお決まりの挨拶が聞こえてくる。

「今年もー、つて。去年は猛吹雪だつたじゃねえか」

きれいにとは言えないが、縦に整列する5人。その一番後ろに並ぶ梅男が、前の人間に話しかける。

身長185cmある上に、立派なアフロが繁茂している為前の人間にちょっと話しかけただけで非常に目立つ。

「真っ白で何も見えなかつたよね」

梅男に後ろから話しかけられ、若干体を反らせながら返事を返す富田。

ゆとりのあるスノーボードウェアを見に纏っている為、本人も気になつてゐる小太りの体型は隠されている。

「富田、鼻水がつらくなつてたよな」

「それは梅男でしょ」

「は？俺じやねえよ。お前だろ」

「俺じやないつて」

押し問答を始めた梅男と富田。

壇上の上ではやつさとはまた違つお偉いさんと退屈な挨拶を始めるところだった。

神経質そうにスノーボードウェアのズボンの裾をしきりに氣にしているのは、富田の前に並ぶ紺。なかなか思うように決まらないらしい。

「晴、どっちがいいかな」

紺は前に並ぶ晴を呼び、ズボンの裾の左右を交互に見せる。

「右の方がいいかな」

「やつぱり?俺もそう思つ

正直どっちも同じに見えたが、大人な晴はちゃんと答えてあげる。

季節は冬。ここは信州のあるスキー場。辺りは雪に覆われ、白一色の雪景色。

山の中腹から見下ろす景色は、一見すると焦点が合わない程の距離にあり、ピントをあわせれば雄大な景色を眺めることができ。そんな美しい景色とは多少不釣合いな、けたたましい破裂音が鳴り響く。

すん すん すん

上空には体の中心まで届くよくな轟音で、音だけ花火が打ちあがる。そつ、運動会の時のおれである。

列の先頭の奈津は、打ちあがるその音だけ花火をぼんやりと見上げていた。

「そろそろ始まる時間だね」

満里は時計を見ながら言つ。時刻は午前11時。

「ああ」

満里の問いに短く答える明。満里の父親であり、スキー場の麓にあるペンションのオーナーだ。

慌しい午前の仕事を終えた二人は、ペンションの喫茶室でカウンターを挟んで向き合い、ひと時の休息をとっていた。

「今年は勝つかなあ」

頬杖をつき、満里は焦点の定まらない目をしながら宙を見る。

「さあねえ」

明は慣れた手つきでコーヒー・サイフォンの手入れをしている。

「奴らは元々勝負にこだわってないから」

「だね」

満里は明の後ろに飾つてある写真に目を移す。

写真には、5人の男たちが笑顔で肩を組んで写っている。写真は額にいれられ、黒のマジックでコメントが書かれている。汚い字。

「2008俺達の冬」

奈津を中心として右側に梅男と富田、左側に晴と紺。雪が降つていたのか、頭や肩に雪がうつすりと積もっている。

「ほんと、子供みたい」

5人の頬は寒さで赤く染まり、その中の2人、梅男と富田の鼻からは鼻水がつららのように垂れていた。

整列している選手達が、鼻水とかズボンの裾だとか、どんなにくだらないしゃべくりをしていても開会式は進行していく。

奈津達の隣に整列しているもう一つの参加チーム「Dragon Boys」の5人は、梅男達の雑音を甚だ迷惑そうにしているが。

「選手、宣誓」

選手宣誓のアナウンスを受け、Dragon Boysの列の中から、1人が壇上に向かう。スノーボードのブーツを履いているから口ボツトみたいな歩き方になる。

彼の名前はアキ。上下カーキ色に揃えたウェアで、開会式用にセットされた壇上へあがる。整列している選手達と向き合う格好となる。

壇上の中央にはマイクが立てられており、その右側にアキが立つ。

「奈津！・・・奈津！・・・」

晴が前に並ぶ奈津を呼ぶ。

「ん？」

我に返った奈津は、晴を見る。

「宣誓！」

壇上を指差して晴が一言。

奈津は晴の指差す方向を見る。壇上では、アキが一人立っている。

一瞬間をおいた後、奈津は慌てて走り出した。

「また出た。奈津の天然ボケが」

紺は壇上へ慌てて走っていく奈津の後姿を目で追う。

晴は渋い顔をしながら首を左右に動かすだけだった。

「V6

「TOKIO」

「忍者」

「言つと思つた」

晴と紺の後ろでは、梅男と富田が古今東西ジャニーズグループye ah!! を始めていた。

冬になると、広大な大地を包み込む柔らかな雪。だが、そのふわふわの雪は踏み固められると一転して氷のよじにツルツルになり滑りやすくなる。

この開会式場も、会場設営などでスタッフが往来することにより踏み固められ、例外なくカチカチのツルツルとなっていた。特に壇上周辺。

スタッフが「気をつけてね」と声をかけよつとしたその瞬間。鈍い金属音が会場に響き渡った。

「うん。

「SMAp」

「マサチ」

「ピンはダメでしょ」

「なんで?」

「グルー プじゃないじゃん」

「CD出しだればいいんだよ」

「ダメだつて」

「モノマネするから許して」

「ダメだつて」

「きつたまちか～どの～」

「似てないよ」

最高潮を迎える梅男と富田の古今東西。

すつ転んで壇上の階段に頭を打った奈津は、額から大量に出血。その手当のため、開会式は一時中断された。

「ほんとに大丈夫なのか?君」

「あ、はい。大丈夫です」

大会スタッフに入念に確認をされたが、奈津はそう答えた。小心者の運命。奈津は、仮に骨折をして脂汗を流しながらでも同じ答えを返すだろ？。

包帯とネットを巻かれ、見舞い用のメロンみたいになつた頭で壇上にあがつた。開会式、再開。

壇上の上で見舞い用メロンが手を上げる。隣に立つアキもそれにあわせて手を上げる。

そして、選手宣誓は始まつた。他ではなかなか見られない最高の選手宣誓。せーの。

「われわれは—！」  
「宣誓—！」

交互に叫びついひ、同時に叫びちやつた。

## 本番！！開始

「ただいまより、ハーフパイプ団体戦、決勝を始めます」

間延びしたしまりの無いアナウンスが鳴り響く。

最高の選手宣誓を経て開会式を終えた選手達は、それぞれにスノーボードを抱えフィニッシュ地点からスタート位置へぞろぞろと斜面を上がつていた。

今日はシーズンを締め括る恒例のハーフパイプ団体戦。

スタート地点に揃つた出場チームの選手達。総勢2チーム。その人数、全10名。

なんのことはない、参加チームが2チームだけだからいきなり決勝戦。

流行らないスキー場の、流行らないイベントの悲しい運命。

参加するメンバーの顔ぶれも毎年変わらない。そのため、もはや私は戦となつていてる。

戦績は過去8年で0勝8敗と奈津達は大きく負け越している。

負け越しと言つか、一度も勝ったことはない。もともと勝敗にこだわってはいなのがだ。

ハーフパイプ競技は、左右の壁を振り子のよつに行ったり来たりを繰り返し、スタートからフィニッシュ地点に辿り着くまでに5回から6回空中に舞い上がり技を繰り出す。

採点ルールは大会により異なるが、ここでのルールはシンプル。

高さ、回転、かつこよさ の3つをそれぞれ10点満点で採点、合計点の多い方が勝ち。その勝数を競うルールである。

一番手は梅男。

スノーボードに限らず、このメンバーでいつも先陣を切るのはこの男。

カラオケも、ファミレスの注文も、お食事会（合コン）の自己紹介も。

だが、スタート地点に梅男の姿は無い。

「お姉さん、もうちょっと下がった方がいいかも」

紺がスタート位置に立つてこるミニスカートのギャングギャルにやさしく声をかける。

「あ、ごめんなさい」

ギャングギャルは愛想を振りまきながら、紺に言われたとおり一歩下

がつた。

そもそもなんのためにキャンギャルを配置しているのか、なんのために3月の終わりとは言え雪が地面を覆うこの季節にミニスカートなのかわからない。

風の噂で伝えたところによると、大会主催者の意向だとか。

梅男を除く4人はスタート地点で腕を組み、じつと前を見据える。

まるで、この後に起る一瞬の出来事を見逃すまいと待ち構えているようだ。

ふと、どこか遠くから獸か何かの雄叫びが聞こえてきた。耳を澄ますと、どうやら丘の方から。

春の気配を敏感に感じ取り山へと戻ってきた鳥達が、これまた不穏な空気を敏感に感じ取りそれまで羽を休めていた木の枝から慌しく飛び立つ。

雄叫びは徐々に近づいてくる。

スタート地点から斜面上を見上げると、ウェアをはためかせ直滑降で滑り降りてくるスノーボーダーが見えた。今ようやく米粒大。

「あ” - - - -」

ライダーがぐんぐん近づいてきてその大きさが小豆大になる頃には、  
その正体が判明する。

その猛スピードのため発生する風圧に、これっぽつとも屈すること無く繁生する丸い植木のような立派なアフロ。梅男だ。

— 1 —

トップスピードに乗ったまま、スタート位置に立つ奈津達4人と、二三郎しながら立ってるだけのキャンギャルの間を通り抜ける。

梅男が猛烈な速度で通り過ぎると、一瞬遅れて吹き付けられる風圧でその短いスカートがめくれあがる。

一  
二  
三  
四

ギャンギヤルは両手でスカートを押さえたが、一瞬遅かった。

奈津達4人は腕を組む姿勢は変えず、顔の向きだけキヤンギヤルに向けていた。さつきからの凝視の狙いはこれ。

「黒ーー！」意表を突かれて叫ぶ富田。

「そのギャップにGAPのギャップをー」 インチキ早口言葉を始め  
る紺。

「モーレツ」やつはつと首を左右に振りながら晴。

「ななな、なんかのCM?」呂律が怪しい奈津。

色めきだつた4人は興奮気味に好き勝手言つてゐる。

毎年恒例、一足早いいたずらな春一番。

「元氣108倍ーーー！」

梅男が両手を突き上げ咆哮すると、猛スピードでハーフパイプに突っ込んでいく。男は煩惱の数だけ強くなるのだ。

「わーーん！」

最初の掛け声で梅男は勢い良くハーフパイプに身を落とす。

「つーーー！」

掛け声その2、でハーフパイプの底を低い姿勢で踏ん張り加速していく。ぐん！

「わーーーんーーー！」

最後の掛け声で、体格に恵まれた梅男の体が空中へ飛び出した。

「スリーじゃないのかよ」

富田が遙か上空に舞い上がつた梅男を見上げる。

「今年はどこまで飛ぶかな～」

額に手をかざし、太陽光線を遮りながら晴。

空には目に痛いくらいの青空が広がっている。

特大ジャンプが放物線の頂上に達すると、梅男は空中で両手両足を大きく広げて叫んだ。

「ぱーーーん！」

こちらも毎年恒例、人間打上花火。

世界は広い。人類は偉大だ。

冬の花火だって、大空を鳥のように飛ぶことだってこうして実現できるのだから。

通常だつたら空中に飛び出す瞬間、踏み切りを誤らなければ自然とハーフパイプの壁に戻る。

しかし、梅男の場合スーパーな速度から生み出される高さと未熟な踏み切り技術のため、この大会では一度も壁に戻ったことがない。

今回もその軌道は本来戻るべき場所からは遠くかけ離れ、ハーフパイプの壁から横に大きく外れたちょっとした崖に向かっている。

雄叫びをフードアウトさせながら、梅男は崖の下へと滑っていく。

そして、数秒送れて轟音が響く。

ズドーン。

## 最後の夜

結果から言つと。

|    |   |   |     |
|----|---|---|-----|
| 梅男 | × | - | 鈴木君 |
| 富田 | × | - | 佐藤君 |
| 紺  | × | - | 山田君 |
| 晴  | - | × | 高橋君 |
| 奈津 | × | - | アキ  |

(奈津負傷棄権)

晴が一矢報いた形だが、1勝4敗。

一番手の梅男から始まり、富田、紺が立て続けに負け、第4戦を待たずには勝敗は決まっていた。

バラエティ番組としては、非常にやつてはいけないことだ。

「最後の人気が勝つたら3ポイントとかやつたら盛り上がるのにね」

などと富田が勝手なことを言つていたが、これは3流とは言え青春小説という文学でありバラエティではない。

やつてこむことはバラエティのなんら変わらなくても、活字として表現しているので誰が何と言おつと文学だ。

兎にも角にも、こつして「2008年俺達の冬」は、奈津達の9連敗というかたちで幕を閉じた。

出番直前に開会式での傷口が開き、またも流血騒ぎを起した奈津

には救急車のお出迎えと、つま先付けで棄権となつた。

抜けるよつた青空を、風に流され颯爽と流れしていく白い雲。彼らは我々に向ひ言葉をかけることなく山の向こうへと消えていく。

そんな雲と同じように、季節と言つのは人知れず、そしていつの間にか移り変わつていくものなのである。

奈津達が冬の間滞在しているペンションは、桃竜温泉街の一角にある。

大会が行われた桃竜山スキー場から、歩いて10分ほどどの距離。オーナーに教えてもらつた裏道を滑つて降りてくれば、ものの数分で到着してしまつ。

暖かいオレンジ色の照明にライトアップされたその建物は、青く塗装が施され南国ビーチのほとりの方が相応しいようと思える。

「ちょっと奈津、元気だしなよ

満里が奈津の背中にに向かつて言った。

奈津はペンションにある喫茶室のカウンターでがっくつとつなだれている。

昼間の怪我で顔全体を包帯でぐるぐる巻きされていた。

「んん。。。

一応返事はするものの、間の抜けた声を発しながらカウンターに突つ伏したままの奈津。

「たいした怪我じゃなくてよかつたじゃない」

3針縫つて全治3週間の診断。充分大した怪我だと思つんだけど。

「うん。。」

「もう。荷物まとまつたの？」

「・・・まだ」

「明日出発でしょ。待たせたらまた置いてかれるよ」

「う。。」

何年か前、もたもたしている奈津は本気でおいて行かれたことがあ  
る。

みんなはわざとじやないと主張しているが、わざとじやないとして  
もそれはそれでひどいことではないか。だって存在を忘れてたって  
ことでしょう。

今の時刻は夜の10時ちょっと前。他の4人は明日の出発に備え早  
々に布団の中へと潜つてしまっている。

奈津はカウンターを立ち、カフェの出口に向かった。

「あ、奈津」

「ん？」

呼び止められた見舞い用のメロンは、立ち止まり満里の方を振り返る。

まつまつまつまつ

鳩時計が一度夜の10時を指し、時計から鳩が出てきてその刻を告げる。

まつまつまつまつ

満里はその場に立ち上がりただけで、何も言わずに奈津を見つめている。

まつまつまつまつ

奈津も満里の言葉を待つ。

まつまつまつまつ

「奈津君」

「うん？」

よつやく満里が口を開く。

まつまつまつまつ

まつまつまつまつ

鳩時計の鳩は役田を終えると、またもとの場所に引っ込んでいく。

お互にが見つめあつたまま刻は流れ。お

「見舞い用のメロンみたいだね」

「寝る」

奈津は喫茶室を出て、4人が寝静まる自分の寝床へ向かった。

「奈津、起きてる？」

奈津は布団に入ると、こいつの間にかウトウトしていたらしい。

名前を呼ばれて、まつと田を覚ます。

「寝ひやつた、かな」

「ん、、、満里？」

顔をあげるとドアのところに満里が立つてこる姿が暗闇の中でぼんやりと見えた。

両サイドにまごびきをかけて寝てる梅男と富田。

「わわわわわわ」

若十つむきながら満里が囁つ。

満里に謝られた記憶など数えるほどしかない。寝起きでぼんやりとした頭だが、いつもと違つ雰囲気にとまどいながらも奈津は何とか答えようとする。

「いや、別に気……」

「んがー！」

梅男のこびきに遮られる。しばらく見ていたら、寝返りをうつて大人しくなった。

「何？」

「あ、、、うん」

満里にいつもの歯切れの良さは無かった。

「明日でお別れだね」

「まあ、うん」

お別れと言えばお別れだけど、これまで毎年あつたばつお別れしてきたではないか。

今の時刻はわからないが、一旦寝入ったところから、夜も結構更けていると思われる。

暗闇の中で目を泳がせながら動きの鈍い頭を働かせる。が、何の考えも言葉も出てこない。

またしばらく沈黙の時間が流れる。

明るいと眠れない、と梅男の意向で部屋は真っ暗。

今部屋を照らしているのは満里が開けたドアから漏れてくる廊下の小さい灯りだけ。部屋の暗さと廊下の照明で逆光となつていて、ため満里の表情は読み取れない。

「あたしね・・・

「ぐがー！！」

ほんとは起きてるんじゃないだろうか。しばらく富田を見ていたら、梅男と同じく寝返りをうつて大人しくなつた。

富田の様子を伺い、再び満里が口を開けようとす。

「ずっと・・・」

「これこれーこれが食べたかったんだよーーー！」

今度は梅男の寝言。どんだけ長く明確な寝言なんだ。

しかも何かを指差して言つてゐる。

今度こそ満里は吹き出しちゃつた。

それと同時に、張り詰めて別人のようだつた満里の周りの空気が変わつた。いつもの満里だ。

「起こしたら悪いね」満里が声をひそめて言つ。

「いや、 、 、 」

起き起きしても起きない連中なんだけど。

「起」はじめんね。 また今度話すよ」

「あ。 、 」

また謝られた。 満里にこれだけ謝られるとい、 雪でも降るんじゃない  
かと、 、 、 あ 雪は平氣で降つてゐるかも。

「それじゃ、 おやすみ」

それだけ言つと、 顔だけを布団から起」していの奈津を残し、 満里  
は静かにドアを閉めた。

ぱたん。

ぱたん。

奈津はドアの閉まる音で目を覚ました。

喫茶室から戻つた奈津は、 布団に潜り込むと二つの間にか眠つてつ  
いていたようだ。

ドアの曇りガラスを見る。 高さも大きさも人間の顔ほどだ。

先ほどの出来事を思い出す。ドアは閉じられていて、満里もいない。

廊下の照明は切られているのか、曇りガラスの向こうは真っ暗で、人の気配はない。

「がー」

「ぐがー」

夢。。か

梅男と富田は騒音のようないびきを撒き散らしている。思えば、よく何ヶ月も同じ部屋で寝られたものだ。

一人の幸せそうな寝顔を見ていると、なんだか無性に腹が立つて来る。

起きてこないと起きは絶対に出来ない。だが、寝ているときには何でも出来る。

奈津は梅男と富田の顔面に、一発ずつ自分の枕を叩きつけた。

ばふつ。ばふつ。

## ぱいぱいーー冬

荷物をまとめた5人と満里は、朝食を済ませて喫茶室のカウンターに横一列に並んで座っていた。

毎年、出発前に明の煎れるコーヒーを飲むことになっている。

座る順番も毎年同じで、奥から梅男 満里 富田 奈津 晴 紗。

「やつぱ苦え」

梅男はコーヒーを一口すすると、次々とカップを置いていく。カウンター他の4人も一口すると、顔をしかめながらカップを置いた。の向こうの明が苦笑いをする。

これも毎年恒例となつた儀式。

5人が唯一飲めるコーヒーは、甘い甘いコーヒー牛乳のみ。

「これがいいんじゃないの」

梅男の隣に座る満里はおしゃれにコーヒーを啜る。

コーヒーそのままの味を楽しんでもらつため、砂糖やミルクは置いてない。オーナーである明の意向。

「ちゅうと酸味があるのみ。あんたたちにはわからないだろうけど」

「なにね——生意氣な女め~」

「IJのパーヒーインテリ女~」

満里を挟んで梅男と畠田が食つてかかる。

「文句があるならちゃんと飲んでから言こなさこよ」

梅男は田の前のパーヒーを睨みつけると、今度はせりあいつまめに啜つた。

「・・・」

「どひ?」畠田が興味津々に聞く。

頑固だけど纖細で上品。例えるなればそんな音をたてながら梅男がカップを置く。

「やつぱはあべ。。。」やつきよつもひどい顔で梅男は言った。

「やつぱはあべ~」

奈津は畠田越しに満里の様子を伺つてゐる。

また今度話すよ

満里にそんな気配は微塵もなかつた。

「オーナー、来年もよろしくお願ひしますね」奈津の隣で晴が言つ。

「来年?」「一ヒーラーの手づけをして、明の手が止まる。

変な間が空いた。

奈津はさつきから満里のちょっとした変化ほ一つ一つが気になっていた。先ほどまで元気に笑っていた満里が、今は一瞬身を強張らせるとよつと見えた。

昨夜の出来事で意識し過ぎているのか。

「ああ、来年ね。うん。頼むよ」

「オーナー、呆けないでよ」

「いや、来年の話をすると鬼が笑うってね、はっはっは」

それから5人と満里は時間にこままで話をした。

とりとめのない話ばかりだが、「会話が絶える」とは無かった。

「オーナー、レモン水ないですか?」

「ちょっと梅男、いきなりなによ」

「俺は今レモン水を一気飲みしたいんだ」

「レモンって、太陽の味がするよね」

「やうやう。レモンって太陽の果物だよな」

「わからないわ。あんたたちが

来年また会える。

一時とはいえやつぱり別れなのだ。名残惜しいのだ。

毎日ビレモビの言葉を交わしても、寂しくない別れなどないのだろう。

ぼっぽ～ぼっぽ～

喫茶室の鳩時計が鳴った。話を遮られ、みんなが一斉に鳩時計に注目する。

ぼつぼ～ぼつぼ～

「うぬせえ！」

話を中断され、梅男が鳩時計の小窓から顔を出す鳩に向かって叫ぶ。

ばたん！

わかってるよ、うるせえな。俺だつて好きで鳴いてんじゃねえんだよ。と言わんばかりに鳩は11回鳴き終えたあと、乱暴に小窓を閉めると時計の中に引っ込んで行った。

明はカウンターに並ぶ6人の顔を見ると、静かに、そしてゆっくりと言つた。

「そろそろバスの時間かな」

この時期になると、陽が出ればじやんじやんと雪は融けていく。

融けた雪は水となり、流れ出る水に浸された道路や駐車場は黒光りをして湯気を立ち昇らせる。

冬の終わり、春到来の光景だ。

ペンションから歩いて5分程のバス発着場。

毎年のようだ、満里とホーリーが見送りに来てくれる。

忘れもんなしか?」

荷物よし  
おみせよし

梅男の掛け声は、富田が指差し確認を始める

奈津が置いてけぼりにされた年から、ネタというか一つの儀式のようになっている。

「あれ、梅男隊長、奈津がいません」

「富田隊員、それが奈津ではないか」

「あ、おみやげのメロンかと思ったんです」

「だつせつせーーー！」

この一人は何かネタを見つけると、ウケなくなるまで徹底的に追求する。

実際ウケているのは当人だけなのが。つまり、飽きるまでうてこと。今回のターゲットは見舞い用のメロンこと、奈津。

「はいはい、奈津よ～し」

紺が奈津の頭を手のひらでぐりぐりしながら言った。ちょっとだけ傷に触った。いてて。

発着場に東京行きのバスがやってきた。5人は荷物を積み、バスに乗り込んだ。

「あんた達さあ、今年こそ携帯買いなさいよ」

「何で？」

「何で、って。便利じゃない。みんな持つてるわよ」

「みんな　って。俺ら誰も持つてないけど」

「あんた達がおかしいのよ」

バスの窓越しに梅男と満里がやりとりをしていく。

奈津はもう一度昨日のコアルな夢を思い出し、明と並んで立っている満里に目をやる。満里と目が合つた。

「奈津も、携帯買つたらメアド教えなさいよ」

やつぱり、いつもと様子の変わらない満里だった。

「メアドって、何？」

満里は諦めたような力ない笑顔をすると、小さく手を振った。

奈津はバスのシートに ズリズリ っと深く凭れ掛かる。

時間になり、5人を乗せたバスはゆっくりと動き出す。

もう何回も繰り返されている光景だが、胸にこみ上げてくるこの複雑な感情に慣れる事はない。

冬との別れの寂しさと、春到来の希望感が同居する感じ。

「また来年ね～！～」

満里は両手を大きく振つてバスを見送る。

隣の明はさすがに両手をぶんぶん振ることは無いが、別れを惜しんでくれてるのはその表情から充分にわかった。

これから自分達が生まれ育つた町に戻つて、熱くて暑い、本に書いたらぶ厚い夏を過ごすのだ。

これは、そんな冬少年達（27歳だけど）の、夏物語である。

5人は窓から体を乗り出し、元気良く別れを告げた。見送る一人に、

「いや、そして今度。

『まつったね～！』

例年より早く梅雨の明けた初夏。ここは千葉県房総半島にある海に面したとある町。

雪山から戻った奈津達は、去年までと同じように春を迎える。梅雨をやり過ごし、迎えた初夏の日差しの下で毎日をのんびりと過ごしていた。

「あひ～しゅ～」

ピンクのブーメランパンツ一枚、背もたれを倒したビーチチェアに横たわり、梅男は空を見上げながら房総の太陽に焼かれていた。夏になつてもやつぱりアフロヘアー。

「ナハハハハハ

こちらは富田。イギリスの国旗をデザインしたブーメランパンツ一枚で房総の太陽に焼かれている。体全体にほんのりと装備された脂肪は相変わらずだ。

二人は全身に塗りたくったサンオイルでテカテカしている。気持ち悪い。

今日は日焼けしにきた梅男と富田。それと、太陽光線を遮るパラソルの下で過ごす奈津、紺、晴の3人がいた。

パラソル下の3人は、木でてきた手作りのイスに座つてそれぞれ本を読んでいる。

「お前ひでー」

ビーチェアに横たわり、空を見上げながら纏わりつぶつな口調の梅男。

「何しに来てんだよ」

「見ればわかるじゃん。ほれ」

紺が気の早いスノーボード雑誌の表紙を梅男に見せる。

「んなーこたーわかってんだよ」

「なんだよ」

「あらやだーーー」の人。なんだよ?だつて!聞いた?

隣の富田がちよつと大きさこ、そしてちよつとおかまぢやんになりながら驚きの声をあげる。

あらやだー と梅男も続く。

「俺が言いたいのは、夏らしこいとしない奴は家に帰れーーー」とだよ

「そりだそりだ!帰れ帰れ!」

「そして家でカキ氷でも食つてろ」

「やつだ！ そつだ！ そしてシロップは練乳だぞ」

「頭キンキンになるまで食べ続け」

「俺ん家にある『カエルのキョロけやんカキ氷セット』を貸してやる」

あーでもない。こーでもない。

この町には、ちょうど真ん中から町を南北に隔てるように川が流れおり、海岸線から500mほど川を上流に向けて遡ったところにマリンショップがある。

建物は丸太で作られたログハウスで、手作りの看板や屋根に飾られた風を見ない風見鶏などの小物からはちょっとしたセンスを感じさせる小洒落た佇まいだ。

そのマリンショップの敷地には、田の前を流れる川が一望できるように戸ツドテツキが施され、奈津達は日常の空いた時間のほとんどをそこで夏らしことをしたり夏らしくないことをしたりして過ごしていた。

「いつから日本男児はこんなに軟弱ちゃんになっちゃんだろうねえ、

梅男君」

パラソル下の3人はとっくに相手にしていなかつたが、2人の皮肉は続く。

「ほんとだよ、富田君を見習つて、梅男は顔だけ富田の方に振る。

「うひ、お前白いよ」

ローストチキンでもこんがり焼きあがるんじゃないかと、「うひ」と強い口差しの中、畠田の肌は、焼き始めの当初とほとんど変わらず白かった。

「いつまで白ブタでござるつもりだよ。それじゃ日本男児のお手本にならねえじゃねえか」

ブタは否定せず、色の部分だけ畠田はサングラスをはずして言い返す。

「梅男もだよ。」Jんだけ毎日焼いてんのに小麦色の小の字にもなつてないじゃん!」

黒ブタなら問題なかつたのかはわからないが、畠田の言うとおり梅男の肌の色にも焼き始め当初からほとんど変化は無かつた。

「なんだとーー白ブタのくせにーーいつして那美ちゃんにもうつたオイルをせつせと塗つてだな。。。」オイルを見る梅男と畠田。

「あの女ーー！」  
「あの女ーー！」

途端にオイルを放り出して事務所に向かつて走つていった。

全身テカテカでビキニパンツ男一人組みの突然の乱入に、外房マリンの事務所から短い悲鳴が聞こえてきた。

晴は足元に転がってきたオイルを拾いパッケージを読み上げた。

「今年の夏は焼かない。紫外線から鉄壁ガード」

「もひ、アンタ達営業妨害よ」

一騒動起こした梅男と富田をつまみ出すよつこ、外房マリンの事務所兼フロントのログハウスから女が出てきた。

手には緑色の液体の入ったグラス。表面に浮き上がった水滴が涼しげだった。

「だつてひでーよ。日焼け止めよこすなんてさー」

「こんがり焼かれるはずだつた俺達の時間を返せ!」

梅男と富田が文句を囁く。

「ちょっと間違えちゃつただけでしょー。ホラ、それ塗れば問題なし

梅男が手にしているものは、今度はちゃんとサンオイル。

女の名前は那美。ここ外房マリンの主だ。

ヘソまで届かないピツタピタの黄色いTシャツに、腿も露わなデニム生地のホットパンツ。

グレープフルーツを仕込んでるんじゃないかといつぽどの胸の膨らみと形のいいヒップを左右に揺らし、フェロモン全開。

未だに納得がいかずぶつくち言つてる梅男と富田を強引になだめ、那美は奈津の元へと歩いていく。

「はい、奈津お待たせ」

「え、僕頼んだの、ジンジャーエール・・・」

ダン！

那美はその言葉を遮るように、奈津の前にトロピカルカクテルの入ったグラスを強めに置いた。緑色の液体がジンジャー エールと異なるのは明らかだった。

「いいからいいから。飲んでみて」

那美は有無を言わさぬその眼差しでじっと見ている。

「大丈夫。サービスよ」

そういう問題じゃ。。。

那美はここ外房マリンでオシャレなBARを始めようと企んでいる。日々オリジナルカクテルの試作を重ね、いつの間にか奈津が実験台となっていた。

その腕前の方はと言つと。

奈津は恐る恐るストローを吸う。

「ふーっ！」

その液体が口の中に入ってきた瞬間、マンガみたいにすぐ吐いた。

「あーひどーい」

いつもも増して、今日はひどい。トーリックシャンプーにペーマンの種を混ぜた味がした。実際どつちも口にしたことないけど。

「あたしは好きなんだけどなー」奈津から取り上げたグラスのストローを吸いながら、那美は首を傾げながら水滴のついたグラスを眺める。

「ふええええ」奈津は緑色に染まつた舌を出す。

奈津は個性豊かな力クテルを飲まされるたびに思つ。

なぜいつもベースがスースー爽やかなメントールなんだろうか。

那美は程よい感覚をあけ、無造作に並べられた手作りのテーブルに手際よく田よけのパラソルをセットしていく。

「アンタ達、他にすることないわけ？」

川では、マリンジェットに引っ張られてウェイクボードをしている若者たちが奇声をあげて水面を元気に滑走している。

「なんかついつてもなあ」そんな若者達を梅男は田で追いかけていく。

「この腹じゅ、ねえ」富田も梅男と同じものを田で追いながら自分の腹をさする。

「気にならぬのか君は

「やつぱウエットスーツで、体型強調されいやばいじゃんね

「強調されなくとも十分やっぱいじゃんね」梅男は富田の腹をつまむ。

「夏は夏らしへ。冬は冬らしへ。ね」富田がビーチベッドに深く沈みこみながら言つ。

「夏は遊ぶ時間ですよ——」伸びをしながら発した梅男の声は、犬の遠吠えのように外房マリンに鳴り響いた。

陽が傾き辺りがオレンジ色に染まり始めると、5人は誰からともなくそれぞれの家へと帰り始める。

奈津も川の土手を登り、家に向かう。途中、足を止め後ろを振り返る。

川に反射するオレンジ色の輝きが思つたよりも眩しく、思わず田を細めながらも向ひ岸を見た。

桟橋の釣り人達もまた、帰り支度を始めていた。

釣り人の1人がこちらに気付き、手を振つてきた。中学時代の同級生、タカだつた。

「ねえ、君のうち漁師なんだつて?」

中学校の入学式を終え、新生活の始まつた記念すべき日。この町の4つの区域に点在する小学校の生徒たちがひとつの中学校に通つ。当然、初めて見る顔とクラスメートになり、前後左右の席を知らない顔に囲まれた。

その知らない顔がいきなり後ろの席の奈津に振り向き、しかも家業まで知つている様子なものだから必要以上に驚き、言葉がうまく出てこなかつた。

「え、 、 な、 なんで知つてるの」

「うちさ、釣具屋やつてんだ。君のうちのおやじさんもたまに釣り餌買いに来るんだ」

そりなんだ と答える代わりに首をゆらゆらと縦に振る。

見知らぬ顔が大勢いるのに加え、いきなりの不意打ちに必要以上に体が強張つてしまつ。

「ねえ、釣りやるの?」

信に連れられて釣りにはよく行っていた。首を縦に振る。

「んじや今度一緒に行こうよ。クラス別になつちやつたけど、よく一緒に行く仲間もいるからわ」

またも奈津は首を縦に振る。今度は大きく2回、3回と。

「俺はタカ。よろしく

「タカ君

「タカでいいよ」

「な、奈津」

「え？」

「。。。。奈津」

「なつ？」

今度は小さく首を縦に振る。

「女みたいな名前だなー」

小さな町の中学校は3クラスにわけられ、どういうわけか奈津以外の4人は同じクラスにかたまつた。

そんな不安の中、初日にできた友達。不安はまだあつたが、これから的新生活に少しづつ胸は膨らんでいった。

奈津はタカへ大きく手を振り返すと、それが帰りの挨拶なのかバケツを持つた手を少し上げ、一いちばんに背を向けて釣り仲間たちと土手を登つて行つた。

奈津はタカの後姿を見送ると、自分も家へと向かう。と言つても奈津の家は外房マリンから5分とかからないことにあるのだが。

家に帰るといつもと違つて静かだつた。

いつもは父親の信が大声を出して相撲か野球を見ているから、非常に騒々しい。

だが、今日は信の愛車の白いトラックも庭にない。

部屋から漏れる灯りもない。

相撲の場所中にTVの前にいないのは珍しい。どこかへ出かけてるらしい。

静かな家の2階にあがり自分の部屋のベッドに横になる。ほとんど間をおかず眠気が襲つてきた。

口の中で仄かにメントールの風味を感じ、喉を鳴らして唾液を飲み込むと、体の要求に逆らうことなく深い眠りへと落ちていった。

## 突然の来客

灯りのついていない暗い部屋をゆっくりと進む。3歩も歩けば窓に辿り着く。

久しぶりだな、ソーリー。

何の気なしに傍らの勉強机に手を置く。

散らかっているなあ。

雑誌や本が散らばる机。

ちょっとは整理しなきゃ。

散らばった冊子をまとめようと本に手をかけたその時、ベッドの上で何かがゆっくりと起き上がった。

その物影を視界の端に捉えたまま息をのむ。そして。

「あやあああああああ！」

「うわあああああああ！」

のどかな町の静寂をぶち抜くよつに悲鳴が鳴り渡る。その声にびっくりした奈津も叫ぶ。

「何よ！奈津かと思つたじやないー！」

「いや、奈津ですか？」

「何してんのよ、こんなところだ」

「うーん僕の部屋ですけど」

「こーわらじるつて言つてよー。」

寝ながら「僕いますよー」と言えぱいのかな。

暗闇の中で数秒見つめあう一人。甘くとろけるやつではなく、早い話がハブとマングース。

薄暗い部屋でお互いの光る目だけを凝視していた。

「なんだなんだ、どうした」叫び声を聞きつけて信がずしらずしと一階に上がつて来る。ハブとマングースの緊張が解けた。

「なんだ、奈津いたのか。いるなーりじるつて言えよ」顔を覗かせ、奈津を見ると信はそう言つた。

だから、寝ながら「僕いるからー」と言えぱいのかな。

「飯できただー」

「はーい」

ずしづし、とんとん、と一人の足音が階段を降りて行く。部屋には呆気にとられた奈津が一人残された。

テーブルには海の幸を中心に、色々と盛り付けている。今日は来客を迎えるためだらうか、いつもより見栄え良く料理を盛り付けている。

「今日は鯛とヒラメが大漁だったからよ」

「わ～、おいしそ～！」

目を輝かせながら料理の皿に思い思つに箸を付けていく。

「やつぱり獲れたては全然違うわね」

温海家の食卓は足の低いテーブルを囲み、床に直接座つて畳じ上がるスタイル。

特に空腹ではなかつたが、奈津がヒラメの刺身に手を伸ばす。箸と箸がぶつかつた。

「あ、どうぞ」「反射的に奈津が手を引く。小心者の習性。いつもそうしてしまつ自分を情けなく思う。

「ありがと」

悪びれもせずにがばー！ とヒラメの刺身をさらつていぐ。奈津はヒラメがまばらになつた皿と、おいしそうにヒラメをほおばる幸せそうな顔を交互に見て箸をおいた。

「何、もひづ」馳走様？』

「こつもほもつと食うだろ。たいした仕事もしてないくせに」

来客があつても相変わらずの信を奈津は呆れ顔で見る。身に着けているのも股引に白いランニングシャツ。まったく。客が来ているのに。客が。。。客?

奈津はぱつと顔をあげ、その突然の来客を見る。

「何よ」

「じじ元来て、奈津はようやく満里に聞いたのだった。

「なんでこりの?」

「なんでこりの?」

次の日。奈津は外房マリンにやつて來ていた。昨日突然この町にやつてきた満里を連れて。当然、4人の反応は声を揃えてこれだった。

「何よ。用がないと来ちゃいけないわけ?」

空には相変わらずじりじりと太陽が照り付けている。

「いや、いやいやいや。来るなら来るつて言つてくれねばよ~

「連絡したわよ」

梅男の言葉にあつたりと満里が答える。

「いつも？」

「せんと」

「嫁?」

「やつね」

「俺の?」

「やうす」

「こつ?」

「一週間前」

「誰が出てた?」

「変な子供が出て話にならなかつた」

「あはははー! だめじゃん梅男ん嫁」

「畠田、あんたん家もね」

「やつね?」

「せんと」

「電話したの?」

「うそ

「家に?」

「やうよ

「俺の?..」

「やうよ

「いつ?」

「だから、一週間前

「誰が出た?」

「猫が鳴いてた」

「お前ん家の方がひでーじゃねーか

「そんなばかな!..」

「晴と紺の家にもね

「嘘?..」

「嘘?..」

晴と紺が声を揃えて叫ぶ。

「あんた達とは電話で連絡とれないわけ？奈津にも連絡いってないみたいだしさ」「

満里の冷たい視線を受け、奈津は小さくなる。

別に自分が悪いわけではないと思うのだが、いつもより3分の2ほど小さくなつた奈津は、漁の準備をしてるあたり信を恨んだ。

「あら、かわいいお姫さんね」

空では相変わらず太陽がじりじりと照りつける中、那美がトロロピカルジュースを手に持つてやってきた。

厚い唇、口元のホクロ。絶妙に垂れた田尻とパツチリした田は、世の男子達を甘い気分にさせる。

「こちこち」満里は軽く頭を下げて挨拶をする。

「こちこち」

「こちこち、信州から来た満里ちゃん」梅男が満里を紹介する。

「あら、ひの店と同じ名前ね」那美は房総マリンの看板を親指で示す。

梅男は渋い顔で唸つた。マコとマリンか。

「丁度よかつたわ。飲む？これ

那美は挨拶もそこそこに、手に持っていたトロピカルジュースを満里の顔の前に出した。今日のは吸い込まれるようにきれいなブルー。

男5人の空気が強張る。丁度よかつた の意味を計りかねている。

「あ、はい。喉渴いちやつて。いただきまーす」

「あ、ヽヽ」

奈津が止めるまもなく満里はストローに口をつけ、一口一口とトロピカルジュースを飲む。

五人は黙つてその様子を見守るしかなかつた。

太陽はいつの間にか頭上高く上り、いつの間にか蝉の声は何重にも重なつてゐる。

それはもはや全方位多重サラウンド。

向こう岸では今田もタカ達が釣り糸を垂らしている。当たりが無いのか、釣り糸を垂らしたままあまり動きが無いのでのどかな田舎町の風景がより一層のんびりとした雰囲気となつてゐる。

満里はストローから口を離し、横からグラスを見る。蝉の声が異様に耳障りだった。奈津達は固唾をのんで見守る。

「おいしーー！」満里の顔が ぱあつ と明るくなる。

「嘘つ！？」5人は声を揃えて言つ。

「何よ。失礼ねアンタ達」

「す」「くおこしーですよ、これ。よかつたら作り方教えてください」

「ここわよ。レジピ書ことこれから。後で渡すわね」

「きやー、嬉しい。あたしもペンションで始めようかな」

「あら、ペンションで働いてるの？」

ガールズトークがはじまつた。こうなると男達の出る幕は無い。

二人の傍ら、奈津が恐る恐るそのトロピカルジュースを手に取りストローに口を付けた。

「ふー！」

リストリンに法曹を混ぜた味がした。

## 房総の夏

5人と満里は房総の夏を思いつきり遊んだ。いや、4人と満里、かな。

海に浮かび、波と戯れ、浜を駆け回り、お腹が空いたら梅男の家族が喰む海の家で思い思いの食べ物をご馳走になり、疲れたら砂浜に立てたビーチパラソルの下で横になる。

「ね、ねえ」

「いやー、房総の夏だねえ」ビーチニアに横たわる梅男は、奈津の呼びかけに答える代わりに大きく伸びをする。

「房総の夏は日本の夏だねえ」風流だがよく聞くと実はよくわからぬ相槌をつつ富田。

深い紺碧色の海は緩やかにざなみ、飽きることなく繰り返し押し寄せる波は地球の鼓動を感じさせる。

人が密集する海辺から少し沖を見ると、晴、紺、満里の三人がゴムボートに乗り静かにうねる波間に漂っている。

「ね、そろそろ出してくれない?」奈津は横になりながら顔だけ梅男と富田の方に向いている。

「なんか、レモンジュース一気飲みしたくな?」

「あ、俺も今そう思つてた」

「レモンって、太陽のフルーツなのかもな」

「絶対そうだよ。だつて太陽浴びると飲みたくなるもん」

「おし、一本行つとく?」梅男は勢い良く立ち上がると、海の家に向かつて走り出す。

「マックスも行つとく?」それに続いて畠田も少し出た腹を揺らしながら走つていく。

「あ、ねえ、ちょっとー!」

奈津が梅男と畠田を追いかけようとする。が、2人を追いかけているのはその気持ちと顔だけ。

奈津の叫びは目に痛いくらいの青い夏の空に虚しく吸い込まれていった。

「わわーー…やつたーー!」

これらは沖のゴムボートの上。

晴と満里がパー。紺がチヨキ。先ほどのゴムボート・ジャンケンに負けた紺は、海に入りゴムボートをバタ足で漕ぎ始める。

「うつやあ、ヽ、ヽ、ヽ

当分出られそう無い。

奈津の額を伝つて汗が滑り落ち、砂浜に染み込んで行く。

奈津は体の上に覆いかぶさる砂の山で身動きが取れなくなっている。

限度といつものを見知らない梅男達に埋められ、その上には世間でお馴染み青い2頭身の猫型キャラクターが築かれた。

太陽に焼き付けられ、加熱された砂浜を足早に通り過ぎていく海水浴客。

その海水浴客達が通り過ぎる度に、奈津は得体の知れないようなものを見るような目で見られ、時には失笑され、時には子供たちのおもちゃとなっていくのであった。

「奈津、いつまでそこそこにのよ

満里の声で、奈津は目を開ける。青い空の真ん中に、満里の顔が浮かんでいた。

好きでこんなことしてると思われてるのだろうか。

満里は黄色い生地にヒマワリの絵が施されたビキニを身に付けている。先ほど那美に借りた水着だ。

あのグレープフルーツ泥棒 那美の水着がぴったり合つなんて、知り合つてから10年近く経つが意外な発見だった。

奈津は膝を抱えて顔の傍らにしゃがみ込む満里の方に顔を向ける

とはできなかつた。

「あれ、奈津も「こー」の？遠慮しないでもつとゆっくつ楽しんでればいいのに」

奈津が掘り出されたところに梅男が通りかかつた。手には俄かに薄黄色に染まつた液体の入つたペットボトル。

奈津は先ほどの梅男と富田の会話を思い出す。レモンジュー！

「あ」

短く声を出した梅男。奈津は梅男からペットボトルを奪い取り、勢い良く口に含む。

奈津は一瞬動きを止めると、含んだ時以上の勢いで液体を吐き出した。

「ふーー。」

「ちょっと梅男、何であんなもん持つてんのよ」

レモンジューを取りに行つた梅男は、厨房で切らしてしまつた酔を隣の海の家から調達して戻る途中だつた。

「しおうがねえだろ。おれん家で切らしちゃつたからお隣さんこもらつてきたんだよ」

夏の稼ぎ時に家の手伝いを免除してもらっていた手前、梅男はお使いをはいはいと素直に引き受けた。

先ほどまで真上から照り付けていた太陽は、やや角度を緩めて浜辺を照り出す。

刺すような口差しやゆりゅうと漂つ熱氣は少し優しさを帯びていた。

奈津はまたもや砂浜の上に横たわっている。海水を飲むと死んでしまうという話を思い出す。お酔はどうなんだろつか。すぐ吐き出しだから大丈夫だよね。と自分で言い聞かせる。

青空を見上げながら過ごす夏。

声をあげ、走り回しながら過ごす夏。

波と戯れながら過ごす夏。

甘酸っぱい夏。奈津の場合、酸っぱいだけだが。

夢のような時間はあつとこう間に過ごしていく。

「いやー、食つた食つた

「ほんと、あんた食べあがじやない?」

腹をさする畠田に満里が言つ。

「百貫デブだからな」梅男。

「百貫もないわ！」百貫が何であるのかはわからないが、デブの部分は否定しない富田。

夕暮れまで海で遊んだ6人は、今度は紺が家族で経営する民宿「安房」にお世話になる。

民宿安房は、一見すると普通の民家と変わらない佇まい。しかしあもてなしも温かく、アットホームな民宿だ。

海水浴場から歩いて5分、水着で海へ行つてそのまま帰つてこれる好立地。

梅男の海の家で遊び、紺の民宿で泊まり、信が獲つてきた魚を富田の父親が調理する。そしてその料理が今まさに6人の前に並べられた。

お金なんてかけなくともいい。心をこめて迎えてあげる。それだけでもてなしの心というのは伝わるものなのだ。

入浴を済ませた一行は、風呂上りツヤツヤの鼻をてからせながら豪勢な夕食を平らげていた。

「夏祭りの日だったら、俺とじーちゃんで作った花火見せられたんだけどな

1人催し物が出せなかつた晴。

「ほんと残念。じゃあ、来年は花火に合わせて来るわ

「来年も来るの？」

「もちろん来るわよ。来年は伊勢海老が食べたいわね」

「ゲンキンなやつ」

「あら、素直つて言つてよね」

満里はそう言つと、窓から外を眺める。陽はとっくに沈み、暗闇の向こうから波のうねりが聞こえてくるだけだ。

「来るわよ。来年も。再来年も。ずっと、ずっと。。。

浜辺に打ち寄せる漣とリズムを合させるように満里はその言葉を繰り返す。寂しそうに見えるその横顔を、奈津はぽんやりと眺めていた。

「痛たたた。。。」

「房総の陽射しをなめてるからだ」

布団につづつ伏せになり、呻き声を漏らす満里に梅男が言つ。

真夏の太陽を一身に受け止め、満里の背中は合成着色料のふんだんに使われたワインナーのような色になっていた。

「梅男、あんたはこっち来るんじゃないわよ」

「何もしねえよ」

「ここから、とにかく近づかないで」

部屋の入り口から一番遠い場所の満里。その隣では、奈津が霧吹きで満里の背中に霧吹きで水をかけ、団扇で扇ぐといつ動作を繰り返していた。

浴衣を腰まではだけたその状況で、奈津はなるべく満里の背中を見ないように田を逸らしている。油断をすると瞼の裏に焼きついた満里の水着姿が浮かんでしまう。

「満里、いつ帰るの？」奈津の隣に自分の布団を敷きながら晴が聞く。

「明日。明日の毎へりこに出るわ

「明日?...もう帰るの?」晴の隣でシーツを整えていた富田が手を止める。

「『』の部屋一週間取つちやつたよ?」富田の隣の紺。やることがいつも極端だ。

「わたしはどんなだけ暇人なのよ」

「そんな急に帰るつて言われたら、これも、これも、これも予定変更じゃんか」

梅男は「旅のしおり」と汚いで書かれたノートを開き、ぱんぱん

ばんと呴きながら一番遠くの布団から満里に迫る。

満里はうつ伏せのままノートを受け取ると、ぱりぱりと開いていく。表紙には『たびのしおり』と汚い字で書かれてくる。

「梅男」

夏のしおりを閉じ、枕元に置く。

「どうだ。帰りたくないなっただけ」

梅男が胸を張る。

「なんで運動会みたいになつてゐるのよ」

隣の奈津に、スケジュールの一部がちらりと田に入った。ビーチフラッグ、ビーチバレーから始まり、ビーチ騎馬戦だと、ビーチ棒倒しとかいう文字があつたような無かつたよつた。

「梅男、0点」

満里のダメ出しに富田が点数を付けると、他の面々も好き勝手言いつめる。

「女心がわかつてない」

「脳みそまで筋肉

「筋肉生命体。。。ぐつ」

梅男が富田の背中に跨り、キャメル・クラッチを極める。富田の体が名古屋城の鯱のように美しく反る。

紺がレフエリーとなり一人の脇に滑り込むと、富田の顔を覗き込む。富田は皿を白黒させながらも、首を細かく横に振る。

一人の間では、

「ギブ？ ギブ？」 「まだまだ、まだまだ」

とこうプロレスさながらのやり取りが行われているのだろう。

梅男は大げな動きでキャメル・クラッチに力をこめる。

部屋はいつもの如く動物園のような騒々しさとなる。

それは冬の雪山のペンションにいても、夏の海辺の民宿にいても変わることはない。

ペンションで野球まがいの事を始めて大騒ぎしたときには、さすがに満里が怒鳴り込んで来ただが。

「騒がしいなあ」

今日の満里は笑い転げるでもなく、怒鳴り込むでもなく静かに微笑みながらその様子を見守っているだけだった。

「。。。。まあ、ちゅうどいいにけど」

満里が小さく付け加えた一言は、富田の悲鳴に搔き消され、奈津以

外の耳には届かなかつた。

「——ん

富田がギブアップすると、遠くの寺で鐘がなつた。それはちょうど試合終了のゴングとなり、それをきっかけに部屋は静かになる。

泣いているのか、布団につつ伏せになつたままの富田を除いて5人はスケジュールを決め直す事にした。

「この、雀島つて何?」

運動会の競技一覧が書き並べられた中、一際異彩を放つ「雀島探検ツアーハ」と書かれた項目を満里が指差す。唯一運動会っぽくないプログラム。

満里の指示したものは、地元の住人しか知らないプライベートビーチ、「雀島」。

南国かと思うほど情緒豊かな風景で、浜辺の写真で絵葉書を揃えてもそれが国内であると判断するのは難しく思える。

晴がその説明を進めて行くに連れ、満里の目は輝いていく。明日の予定に異論を挟む余地は無くなつた。

翌日の予定が決まると、遊び疲れたのだからそれが布団に横た

わり、発せられる言葉も疎らとなつた。

眠つてゐるんだかいじけてるんだかわからない【富田】。

それ以外の5人も房総の太陽光線をふんだんに吸い込み、その身を倍にして包み込む布団の中で静かな寝息を立て始めた。いや、静かでもないか。

「んがー」

「ぐがー」

田を開けると満里は暗い部屋の中にいた。

息苦しく、ドス黒い空気が充満している感じ。

一歩足を前に踏み出しても、進んでいる感覚は得られない。

声を出そと腹に力を込めるが、喉は何かで栓をされたように声が出ない。

ふいに、背中に刺すような痛みを感じる。

思つようにも動かない体に鞭打つて何とか背中を見る。ブサイクな三毛猫が満里の背中に爪を立ててぶら下がつていた。

ちよ、ちよ、ちよつと、やだ、

根拠は無いが、富田の家の猫だと直感的に感じた。

振り解こうとすればするほど猫の爪は食い込み、痛みが増していく。

やだ、やだ、やだ、ヽヽヽ

背中の猫と格闘していると、いつの間にか富田が目の前にいた。

知つてゐる顔の出現に、満里は安堵し助けを求めるよ

畠山・久松

が、富田の様子はおかしい。

氣味の悪い薄ら笑いを浮かべながら、黄色いペースト状の何かをバケツの中で練つている。

な、何？富田何やつてゐるよ

富田は練り上げられたペーストをおたまで掬い上げ、にたゞと笑つた。

自分の声で目を覚ます。

奈津達5人は驚いた顔で満里を見ていた。

布団の上で上半身を起こした満里は、肩で大きく呼吸をしながら周囲をゆっくりと見渡す。清々しいばかりの日差しが差し込み、窓から眺める空はまだいまでも青く澄んでいる

満里は首を回し、自分の背中を見る。

猫の姿は無く、昨日身に着けた浴衣の模様が目に入る。

激しく寝返りをうつたのか、背中がヒリヒリと痛んだ。

「からし、 、 、 」

息も絶え絶えに満里が言つ。

「か、からし」

満里の言葉を復唱する富田の手には、からじで真っ黄色になつた納豆が糸を引いていた。

5人は既に布団を片付け、テーブルに並べられた朝食を囲み、全員が納豆をかき混ぜていた。部屋には鼻にツンと抜けるからしの香りが充満していた。

「満里、ほんとに帰るのか？」

「飯に海苔を器用に巻きながら梅男が聞く。」

「うん

満里は背中に纏わる悪夢で目を覚ますと、そのまま朝食の卓に着いた。背中の痛みは日焼けというより、猫に引っ搔かれた痛みに感じられるようになっていた。

「残念だなあ」畠田は2杯目の黄色納豆をかき混ぜている。

「一ヶ月でも居てもいいのに」相変わらず極端で無謀な紺。

「私はどんだけ暇なのよ」

「じゃあ、次会うのは冬か」晴がかき混ぜた生卵をご飯にかけながら皿へ。

「。。。。うん」

満里はアジの開きをつづいていた箸を止めて俯く。

急にトーンダウンする満里に、5人は視線を集め。

「どうしたの？」

様子を伺うように梅男が満里を覗き込む。

「。。。。うん

満里が俯きながら顔を左右に振る。

「ただ。。。」

「ただ？」

「寝不足なだけ」

「ほら富田ーお前のイビキがうるさいから」

「それは違う。梅男でしょ」

「一人共だよ。

## お別れ

5人は昨日決めた予定通りに絶景ポイント「雀島」へとやつてきた。

正式な名称かどうかはわからないが、地元ではそう呼ばれている。

「どうだ？ すげえだろ」

言葉にならない感動の声をあげる満里に、梅男が我が物顔で自慢する。

飛行機に乗つて国外へ出なくとも、美しい景色といつのはいくらいでもある。ここ雀島もその一つだ。

満里は黙つて自分の故郷の山を思い出す。

自分の住む桃竜山だつて、この雀島に負けないくらいの美しい景色は有つたはずだ。

小さな頃から眺めていて慣れてしまつたのか。それとも、心が、目が曇つてしまつたのか。

山から見下ろす両手で掬い取れそうな小さな町並。ランドマークといつたら大げさだが、あの町で存在感を示す歴史あるホテルはミニチュアのように見えて大好きだった。

そうだ。小さい頃その風景を飽きもせず、日が暮れるまで眺めていたではないか。

辺りが薄暗くなつてもお気に入りの岩場に腰掛け、毎日毎日同じ場所から同じ景色を眺めていた。

「違うもん。毎日違うお顔になるんだもん」

完全に日が暮れる前に決まって迎えに来てくれる明にそう書いた記憶が蘇る。同じところから同じ場所を見ても、町は一日として同じ表情を見せることは無かった。

そして満里は、何年かのその風景を思い出すことができない自分で気が付く。

小さじ頃に見た景色は、心の中に鮮明に刻み込まれこんなにもはつきつ思い出せるもの。

母が家からいなくなつたのもそつ。気付くのはいつも遅い。手遅れになつてからだ。

満里は誰に向けるでもなく言葉を吐き出し始める。

「海はいいよね」

「うん?」

梅男が短く聞き返すが、満里は海を真っ直ぐ見たままだ。

「一日とは違う」

5人は満里の言葉の真意がわからない為、雀島の景色を眺めながら次の言葉を待つ。

青い陣地を一つに分けるように、飛行機雲が空に線を引いていく。その音が耳に届いてこないことをなんとななく不思議に思う。

耳の中を埋めるのは、優しく頬を通り過ぎていく風の音と、一定のリズムで波が奏でる心地良い波音だけ。

「人間がどんなにがんばったって、海を自分の物にする」とはできないだもん」

浜辺で遊ぶ小さな子供と両親を見て、奈津は小さい頃に信と母と家族3人でこの場所に遊びに来た時の事を思い出す。

鮮明に覚えているのは、陽が当たらないよう日陰に寄せておいた昼食用の弁当がカラスに持つていかれたことだ。

波打ち際で奈津と一緒に波と戯れていた母がカラスに気付き、慌ててお弁当に駆け寄ろうとした。が、いかんせん距離があり過ぎた。

カラスはから揚げやワインナーなどおかずの入った弁当箱を選び出し、悠々と上空へ舞い上がつていった。現代のカラスは美味しいものを見つている。

食べ物を奪われたと言つのに、信と母は楽しそうに笑っていた。それがその時とても不思議だったが、楽しそうに笑う両親につられて自分も笑つた。

そして、大人になつたら一人が何で笑つてゐるのかわかるようになるのかな、などと子供心に考えたのを覚えている。

言葉を発しない他の5人も、奈津と同じようにそれぞれ思いを巡らせていく。長い沈黙の時を、誰一人として気にしなかつた。

遙かな空間を越えて飛行音が耳に届いてくると、奈津は我に帰った。なんだかずいぶん長い時間昔の思い出に浸っていたような気がした。

満里の話を途中まで聞いていたことを思い出し、慌てて隣を見る。満里がまさに口を開こうとしていた。

「。。。うちのスキー場、今年を最後に閉山するんだ」

美しい景色がそうさせたのか、満里は自分でもわからない。わからないが、それまで喉元の直前で蓋をされ、押さえつけられていた言葉が驚くほど自然に出てきた。

雀島の景色を眺め、想い想いに頭を巡らせていた5人は一転ものすごい勢いで現実に引き戻される。そして、一斉に声をあげた。

「な”あ”！？」

駅まで送る道中満里は喋り続け、梅男が相槌を打っていた。だが、その相槌も氣の無いものになつていて。

「知ってる？あの有名なスキー場も、うちと同じように閉鎖つて話があつたのよ」

満里は国内で冬季オリンピックが開催された某スキー場の話を始めた。

「でも、大好きなスキー場を守らうって。そこを本拠地にしてるハイダー達ががんばったの」

良く晴れた曇下がり。歩いていると、草の匂いが夏の熱気とともに漂つてくる。

「頑張つてうまくなつて、色々な大会に出ていい成績残して、有名になつて、署名を沢山集めて」

そしてその想いは沢山の人々の心を動かし、一度決定された閉山を覆し、遂にはオリンピックも開催されるほどのスキー場へと変貌を遂げた。

「うん」

「ねえ梅男、聞いてないでしょ？」

「うん」

「もう」

奈津は週末でも混むことの無い人の疎らな桃竜山スキー場を思い出そうとするが、すぐにやめた。

どうしていいかわからず、並んで歩く晴の横顔をちらりと伺う。

困つた時、いつも頼りになる存在だった晴が、何か言ってくれるのはないかという望みを持つて。

だが、晴に口を開く様子は無く、むしろ口は真一文字結ばれたままだ。

日差しは強く、遙か先を見据えると陽炎がゆらゆらと揺らめいている。考える事を放棄したくなる暑さと急な知らせだった。

一行は満里に気の利いたことは何も言えないまま駅へと到着してしまつ。

外房線の電車がホームへゆっくりと入ってくると、満里が5人より一步前に出て電車が止まるのを待つ。

空気が勢い良く漏れる音とともにドアが開く。電車に乗り込み、満里は入り口付近でこちらを向いた。

「また、 、 、 冬にな」

毎年当たり前のように決まっていたこと。だが、今は状況が変わり、この言葉が喉元に刃物を突き付けてくる凶器のように感じた。

「うん。 楽しみにしてる」

あの山で過ごす、最後の冬。誰も口にできない。

奈津は桃竜山出発の日、いつもと少しだけ様子の違う喫茶室の満里と明を思い出す。満里はもっとずっと前からこの事を聞かされたのだろう。

だが、今の今までの事を口にしなかった満里の気持ちは痛いほどよくわかつた。

駅員が笛を鳴らす。

「ばーじばー」

満里が手を振る姿を見て、5人は一瞬息をのむ。

開いたときと同じように勢い良く車窓の漏れる音とともにドアが閉まる。

無力

ただその言葉だけが重く全身にのしかかっていく。

ゆっくりと動を出した車両を、奈津は何もできず見送るだけだった。

## 水も滴る

夕方の漁を終えた奈津は、川の土手に上がり外房マリンを見下ろす。太陽は西に傾き、空にはオレンジと紺のグラデーションが鮮やかに広がっている。

いつもだったら誰かしらいるウッドデッキも、都会からバケーションに来た奈津達と同年代ほどであろう男女が楽しげに談笑しているだけだ。

あれから3日。奈津はこの時間にひじして外房マリンを覗きに来るが、4人の誰かと顔を合わせることはなかった。なんとなくみんなバラバラになつている。

奈津は川に沿つて伸びる道を上流に向かつて歩き出す。沈みかけた西日を正面に受けて田を細める。

小さい頃には整備もされず雑草も伸び放題だったこの道路も、数年前にアスファルト舗装された。

道の脇に田をやる。幼いころ家族3人でこの土手を散歩した時のことと思い出す。

「奈津、この世で食えない葉っぱは何種類あるか知ってるか？」

比較的雑草の少ない部分を選びながら奈津が母親と手を繋いで土手

を歩く。その2人の少し前を雑草などお構い無しに信が歩く。

「んー、わかんない。1200」

それを聞いて母が吹き出す。

「どうから出てきたのよその数字」

信は道端の草を2本引き抜く。茎の部分の皮を軽く剥がすと、そのうちの一本を奈津に渡す。

「なんど、3種類しかないんだと」

真偽のほどは定かではなく、むしろ疑わしい内容の蘊蓄を口にしながら信は茎の太い部分を齧る。奈津もそれを見様見真似で齧つてみる。

口の中に広がる酸味に堪えきれず、顔を顰めて渋い顔をする。

「あー、あー、あーははは」

オレンジ色に染まる川の出でに3人の笑い声が鳴り響いた。

昔齧つたものと同じ植物を徐に引き抜く。あの時の信と同じように皮を軽く剥いでいく。

齧る前から口の中に酸味が広がり、唾液が溢れ出してくる。

植物の名前は、たしかスカンポ。

スカンポの茎を齧る。酸味が口の中に広がる。顔を齧めるほどの中味ではなかつた。

「おひ、奈津」

ふいに呼びかけられ、後ろを振り向くと紺が一いつひに向かって歩いて来るところだった。

「紺」

「何してんだ? こんなところで」

「いや、ちょっと散歩を」

「ふーん」

紺は奈津の手にしている植物と、道端で短くなつた植物を見比べる。

「俺こないだこの辺で小便したから、やたらと触らない方がいいぞ」

口に含んだスカンポの汁が勢い良く飛び出した。

「ぶーー!」

どこへ向かうでもなく土手を進んだ紺と奈津は、川辺に降りる階段に腰掛ける梅男、富田、晴の姿を見つけた。

「うわー。濁んでるなー」

階段に腰掛けた3人のどんよりした背中を見て紺が独り言のよつて咳くと、路面の舗装とあわせて整備された川べりに続く階段を降りて行く。

何の祭られ」とか、階段の脇には巨大な岩が置かれ、藁を束ねた縄がぐるっと一周されている。

誰も手入れをしてないのだらう、風雨にむしろまれみずぼらしくなった紙垂がその縄にからづじてぶら下がっていた。

「3人揃つてなにやつてんだよ。こんなとこで」

3人は首だけ振り向けて土手の方を見上げる。そこで偶然一緒になつてた、と富田が返事を返す。

奈津と紺は階段を数段降りると、3人に倣つて石段に腰掛ける。気まずさがそうさせるのか、それぞれ同じ段には座らず低いところから梅男、富田、晴、紺、奈津の順番に座つた。

陽はすっかり暮れ、蝉の声も疎らになる。それつきり誰も口を開かないから水面に跳ね上がる魚の水音が驚くほど良く耳に届いた。ぱしゃん。

上空では無数に輝く星に交じり、一定間隔で点滅する飛行機の灯りがはつきりと見えるようになつていた。

梅男が傍らの小石を川に向かつて投げる。間抜けな水音が鳴ると、

そこを中心として滑らかな円が広がっていく。

梅男に続いて富田も石を投げる。梅男の時よりちよつと高い水音が鳴つた。

紺、晴も続く。そして奈津も。波紋はいくつにも重なり、ぶつかり合ひ、先ほどまで穏やかだつた水面が漣立ち、乱れる。

5人の心中を表現するならば、丁度こんな感じになるのである。

手の届く範囲に手<sup>1</sup>いろな石がなくなると、梅男が立ち上がる。そして、土手の傍らに祭られてある巨大な岩に手をかけた。

高さは梅男の身長と同じくらい、横は大の大人が両手を広げて漸くその円周の半分に至るうかといつほどだ。

「ぬああああああ！」

梅男は雄叫びと共に力を込める。梅男の腕に筋が立ち、血管が浮き上がる。

重力の抵抗も虚しく、岩はついに頭上へと抱え上げられた。4人も、岩の重量を数値で測ることをやめる。

富田は後ろを振り返り、晴と田線を交錯させる。言葉ではなく、アイ・コンタクトで会話をする。

(いつも思うんだけどさ)

(うん)

(人間、だよね)

(多分)

「どうやああああ！」

怒号とともに放り投げる。岩は放物線を描き水面へと飛んでいく。

奈津は小さい頃に行つたディズニーランドの某アトラクションを思い出す。

そのアトラクションに乗り、どのような結果になつたのかは明確に思い出せたが敢えてその場から動くことはしなかつた。

大量の水に打ちひしがれるのも悪くない、と思つた。

ズドーン。

軽く地面が揺れたような気がした。いや、実際に揺れたのかもしない。視界が一瞬揺らいだあと、大量の水が舞い上がる。辺りはスコールに見舞われたような状態になる。

奈津はたじろぐことなく舞い降りてくる水をその身に浴びた。その冷たさが心地良かつた。

さすがの梅男も今回ばかりは肩で息をしている。

4人は「なんで? 何で投げた?」と無駄な問い合わせはしない。

「投げる石がなくなつたから」

と返つてくるのはなんとなくわかつたからだ。

呼吸が整わないまま、梅男はぐるりとこじらを向く。

「行くぞ」

短い言葉だったが、久しぶりに梅男の人間語を聞いた気がした。さつきからつおーとかどりやーとか。

その短い人間語を口にした梅男は階段を上がっていく。

4人も大きく波打つ水面を背に重い足取りで土手を上がり始めた。

「あれ、梅男」

梅男の家は左の方向にある。奈津が梅男に声をかける。が、右に向かう梅男はそれには応えずに歩き続ける。

「何でお前ら何も言わねえんだよ」

梅男の問いに誰も答えなかつた。人のいなくなつた土手には5人の足音だけがしつかりと鳴り渡る。

「お前ら、見たことあるか」

4人の応答はない。かまわずに梅男は喋り続ける。

「俺は初めて見たぞ」

それでも誰も答えない。それでも梅男は喋るのをやめない。そして  
どんどんどんどん歩いていく。

「あんなん見せられたら、やるしかないだろ」

それでも誰も何も言わない。代わりに、富田と紺が顔を見合させる。  
そして段々と気持ち悪いにやけ顔になつていく。

ここにいる全員が、梅男の言わんとするることをわかっているから。

5人は、誰からともなく早足になる。奈津も嬉しくて笑顔になつていぐ。

なんだ、やっぱりみんな同じこと考えてたんだ。

気がつけばいつの間にか走り出していた。そつ、この道の先にある、  
外房マリンに向かって！

入り口のドアが勢い良く開き、水を滴らせたら人が外房マリンに雪崩れ込む。

「那美さん、ウェイクーー！」 富田が人差し指を立てて叫ぶ。

「ちょっと、何！？」 デスクで事務処理をしていた那美は驚いて立ち上がる。

「ボート貸してくれよー！」 梅男が勢い余つて前のめりにカウンターに両手を着く。

「だから、なんのよいきなり」

「那美さん、俺達ウェイクやることにしたから、晴が続ける。

駅で満里が5人に初めて見せた涙。山育ちだろうが、捌けた性格だろうが、やっぱり女なのだ。生まれ育った場所がその役目を終えると聞いて平氣で笑つていられるわけがなかつた。

涙をこらえ、必死に笑顔を作ろうとする満里のくしゃくしゃな顔は、5人に断固たる決意をさせるものとしては充分過ぎるほどなものだつた。

那美は決意に満ちた5人の顔を順番に見回す。

「そんなの、無理に決まってるでしょう」

梅男が那美に詰め寄る。

「何で！」鼻先と鼻先がくつついた。それでもたじろぐことなく梅男の目線を真っ向から受け止める。

近距離でしばらく目線を激しく交錯させた後、那美は梅男から目線をはずして後ろに並ぶ4人の顔を順番に見る。皆同じ目をしている。

那美は肩の力を抜き、窓の方へと歩いていく。そして、ブラインドを開けた。ビヤー！

「外はもう真っ暗。ウェイクボードは、太陽の下でやるものよ」

「ううして、「俺達のスキー場を取り戻せ」大作戦は始まった。

スノーボードで日本一になつて、自分達のスキー場を取り戻す。雪山の借りは雪の上で返すのだ。

そうと決まれば冬も夏も秋も春も無い。雪の上だろうが水の上だろうが人工芝の上だろうが、板の上に横乗りし、ひたすら滑り続けるのだ。

根拠なんてどこにもない。常識？確率？可能性？そんなものは考えるだけ無駄だ。

自分たちでできること、全力でぶつかっていくだけだ。

「わーっしょい！わーっしょい！」

穏やかな川の水面が満月と無数の星を映し出す中、5人は外で胴上げを始めた。宙を舞っているのは奈津。

何か嬉しいことや楽しい事があつたときの儀式のようなものだ。

「奈津！てめえ！胴上げされる奴は万歳しろ！」梅男に叱咤され、宙を舞いながら両手をあげる奈津。別に好きで宙を舞っているわけではないんだけど。

「わーっしょい！わーっしょい！」

進んで飛んでるわけではないが、本気で嫌だと思つてゐるわけでもない。5人全員の心が一つになつた時にこの胴上げをしてきたからだろう。

奈津は何回か宙を舞つた後、満月をきれいに映し出す滑らかな水面へと放り投げられる。

ちやつぽーん。

川の大きさを考えると、取るに足らないくらいの小さな水しぶきが立つ。

だがその小さな水しぶきも、さざ波を立て、向こう岸にたどり着き、自信はまた元の場所へと舞い戻つてくる。

いくつもの漣は重なり合い、やがて川全体を揺らしていく。

そうだ。

スキー場閉山という大きな川の流れも、今ここに立つた5人の小さな漣から始めるのだ。

先ほどから水をかぶりつぱなしの奈津。それでも今の気分を言葉にするのならこの一文字。

最高 だ。

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \* キ リ ト リ \* \* \* \* \*

はーこどーも  
あいもーど

ほつしーです。

じーじーまで読んでくれてびつもあつがとつです。

じーの続あはせやんとあつます。ちやんとかびつかはわかりませぬが、  
あります。

もし「もつとよみてえ」と不覚にも思つてしまつた方々は、「メン  
トでもメッセージでもいただければ読める場所をご案内します。

まつてゐるよーん& amp; #9786;

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4159e/>

---

ぶらっちなむ・ボーアズ

2010年11月14日09時33分発行